

今このページをご覧の方は、” Biomedical Research-J-STAGE” などの検索語を使って、あるいは J-STAGE のプラットフォームからこのサイトに入って来られたと思います。

本誌は 2020 年からオンライン投稿審査システムを導入しましたので、以下の URL から本誌のサイトに入り、アカウントを取得（” Create An Account” を押す）の上ログインしてください。ログインののち、ダッシュボードの” Author” を押して、投稿手順に沿って作業をしてください。

<https://mc.manuscriptcentral.com/bmr>

ホームページもご覧ください：biomedical-research-tokyo.net

2 段階認証について（2021 年 1 2 月 1 日から導入）

システムにログインされる際は、以下の手順に沿って使用する端末ごとに認証を行ってください。

1. 普段通りユーザーID/パスワードを使ってシステムにログインします。
2. 未認証の端末から SIM にログインした場合、「Unrecognized Device」というメッセージが表示され、Primary Email Address 宛に認証コードが記載されたメールが自動的に迅速に送信されます。
3. メールに記載された認証コードを確認し、「Unrecognized Device」画面に認証コードを入力します。
5. "Remember this device"にチェックを入れておきます。
*チェックを入れることで端末の認証情報が 6 か月間保存されます。
6. "Verify"ボタンをクリックして端末の認証を完了します。

*誤った認証コードを何度も入力するとしばらくの間アカウントがロックされますのでご注意ください。

Biomedical Research (Tokyo) 誌の概要と投稿規定

本誌は、医学生物の広い範囲をカバーする英文の学術誌である。1980 年に創刊され、現在も隔月で発行されている。2026 年に創刊 47 年を迎え、第 47 巻を発行する予定である。科学技術振興機構（JST）の電子ジャーナルサイト（J-STAGE）やアメリカ国立医学図書館のデータベース（MEDLINE）では Biomedical Research として、Clarivate Analytics 社（以前の Thomson Reuters 社）のデータベース（Web of Science と Journal Citation Reports）では、後続の同名誌があるため、Biomedical Research-Tokyo として収録されている。したがって、混乱を避けるために Biomedical Research (Tokyo) という誌名を使うことにしている。本誌は学

会や出版社との関係はまったくなく、独自で発行されている総合誌であり、編集部と事務局は以下の場所におかれている。

Journal Citation Reports によれば、本誌のインパクトファクターは、2024年版では1.3 (2021年版では 2.964) である。本誌は J-STAGE のプラットフォーム上で創刊号(1980 年 Vol. 1)から電子ジャーナル化されている。MEDLINE (PubMed) とのリンクは 2005 年分から実施されており、2005 年以降は PubMed から J-STAGE へとリンクアウトできる。なお、制約はつけていないので、誰でも無料で閲覧できる。2017 年以降は、冊子体をやめ、完全にオープンアクセスの電子ジャーナル、つまりゴールドオープンアクセスになった。

1. Biomedical Research 編集部 (編集長)

〒060-8638 札幌市北区北15 条西7 丁目
北海道大学大学院 医学研究院 組織細胞分野 (名誉教授)
岩永 敏彦
e-mail: tiwanaga@med.hokudai.ac.jp

〒980-8575 仙台市青葉区星陵町 2-1
東北大学大学院医学系研究科 医用動物学分野 教授
北村 浩
e-mail: hiroshi.kitamura.d8@tohoku.ac.jp

Biomedical Research 事務局 (会計担当)

〒418-0011 静岡県富士宮市栗倉 2480-1
(株) 矢内原研究所
Tel. 0544-22-2771; Fax. 0544-22-2770
e-mail: shinohara-nagon@yanaihara.co.jp

1. 編集委員（順不同）

田中耕三（東北大学、細胞生物学、腫瘍生物学）
太田邦史（東京大学、ゲノム学、エピジェネティクス）
広田 亨（がん研究所、腫瘍生物学、染色体）
三木隆司（千葉大学、生理学、糖尿病）
森松正美（北海道大学、実験動物学・生化学）
木村俊介（北海道大学、免疫学）
甲賀大輔（旭川医科大学、解剖学・顕微鏡観察法）
小林純子（長崎大学、組織学）
伏木 亨（龍谷大学、食品科学）
前田健康（新潟大学、口腔解剖学）
保坂善真（九州大学、細胞生物学）
渡辺雅彦（北海道大学、神経科学）

•Izumi Kaji: Cell and Developmental Biology, Department of Surgery, Vanderbilt University Medical Center

•Amy Engevik: Regenerative Medicine & Cell Biology
Medical University of South Carolina

•Kim E. Barrett: Distinguished Professor of Physiology and Membrane Biology
School of Medicine, UC Davis

2. 掲載論文と雑誌の性格

本誌は、医学生物学分野の原著論文および総説を掲載する。統計報告や臨床医学の症例報告などは適さない。また、新薬の治療効果や食材の影響を個体レベルで調べて統計的な解析を行っただけの研究も、本誌にはふさわしくない。メカニズムの解明や生物学的興味をそそる実験医学的な研究論文が望まれるが、記述（描写）的 *descriptive* な内容でも大いに歓迎する。

本誌では、スピーディーな論文発表をめざしており、受付から査読終了（採択の決定）まで2週間以内である。学会の機関誌ではなく、文部科学省の補助金を受けていない。また 完全なオープンアクセスなので、本誌の発行費用は著者の掲

載料に依存している。

3. 論文のタイプ

Full paper (Regular article)は、Title page, Abstract (英単語数で200字以内。最後に5つまでのキーワードをつける) , Materials and Methods, Results, Discussion (Results and Discussionも可) , Acknowledgements, Conflict of Interest (COI), References, Tables, Figure Legends, Figuresという順序で構成される。

Communication (短報) は、刷り上がり 4 ページ以内の長さを目安に、原稿ではAbstract (英単語数で 100字程度。最後にキーワードをつける) 以外は、上記のようなセクションに分けず、見出しもつけない。「短報」は、単に短い論文を指すわけではない。意外性やオリジナリティは非常に高いけれど、所見の厚みを増す(より確実なものにする)には時間がかかるため、プライオリティをとることを第一に考え迅速に発表するものである。

Review (総説) も歓迎する。そのスタイルは基本的にはRegular articleと同じであるが、不明な点は編集部へ問い合わせてもらいたい。

原稿では十分な行間をとり (ダブルスペース)、各ページの上下左右には十分な余白 (25 mm以上) を設ける。タイトルページには、タイトル、著者名、所属、30字以内の短いタイトル (Running title)、責任著者 (Corresponding author) の連絡先をつける。ページ数はタイトルページから始めて、順にページの隅につける。その他のスタイルは、最近の掲載論文を参考に。

予備的な また補足的なデータは、Supporting data (Figure or Table)として論文の最後に掲載することができる。

*カバーレターは日本語でも良い。

単位の表記

主な単位では、L (for litter), h (hour), min (minute), sec (second), msec (millisecond), $\times g$ を用いる。ラテン語はイタリック (斜体) 表記にする (例: *in vitro*, *in situ*, *et al.*)。そのほか、Probabilityは *P* (大文字、イタリック)、Student's paired *t* testは *t* (小文

字、イタリック)、キロダルトンは kDa。

4. 文献の引用

文献は、本文中に筆頭著者と年号をカッコ内に入れ：(Iwanaga *et al.* 2020) または(Hirota and Iwanaga 2020)のように引用する。カッコ内の文献が複数のときは、古い方から年代順に並べる。引用文献欄 **References** では abc 順にリストアップする。著者数が多いときは、最初の 5 名まで挙げ、6 名以後は *et al.* とする。なお、番号を付す必要はない。DOI も通常は必要としない。

データベース上でタイトル中の各単語が大文字で掲載される雑誌がかなり存在するが、文献欄では基本的にはタイトルの最初の一文字だけを大文字にする(センテンス スタイル)。

5. 倫理規定およびCOIなど

・ 人体試料および動物実験の倫理規定

例：The Ethics Committee of xxx University approved this study. All methods were performed in accordance with relevant guidelines, regulations and the Declaration of Helsinki. Written informed consent was collected from all participants.

本文の最後(Referencesの前)に記すものとして

・ 利益相反 Conflict of Interest (COI)

例：The authors declare that they have no conflicts of interest.

・ 資金援助 Funding

・ 著者の役割分担 Author contributions

例：TO designed the study. MH and TO conducted the experiments. MH, KT, and TO conducted data analyses and drafted the manuscript.

6. 図のサイズ

掲載時 (PDF 上) に 図は 16 cm (ページのヨコの長さ最大値) 以下か半分の 8 cm に縮小される。図は関連のあるもの、同じページに掲載したいものは、著者自身が組み合わせ、希望するレイアウトにすること。

7. 著者負担

ページチャージとして刷り上がり (PDF 上の) 1 ページにつき 8,000 円かかる。カラーの図表を使う場合の追加料金は発生しない。PDF 版を使つての別刷り (上質紙) の作製を受けつける。実費になるが、刷り上がり 8 ページで 50 部の場合、1 論文あたり およそ 10,000 円である。

8. クリエイティブ・コモンズ (CC) ライセンス

クリエイティブ・コモンズは新しい著作権ルールで、オープンアクセス化に伴いポピュラーになった。本誌では、6 種類あるライセンス条件のうち、原作者のクレジット (氏名、作品タイトルなど) を表示し、かつ元の作品を改変しないことを条件に、営利目的での利用 (転載、コピー、共有) が行える CC ライセンスをとりいれている。



また、本誌に掲載された (あるいは掲載予定の) 論文を機関リポジトリを介しインターネット公表をすることには、制約や条件をいっさい設けていない。したがって、上記 CCライセンスに則り編集部の許可を得ることなく、公表しても差し支えない。

9. 論文作成のその他の注意点

1. パラグラフの構築

内容が変わるごとにパラグラフを新しくする。パラグラフの最初の文を読めば、そのパラグラフで扱っていることがわかるようにする（トピック センテンス）。パラグラフの最後の文は、そのパラグラフで述べたことの結論になっている（コンクルーディング センテンス）。従って、パラグラフにはある程度の長さが必要である。

2. 受動態よりも能動態

より英語らしい表現にするには、できるかぎり能動態にすべきである。日本人の英語は受動態が多い傾向にあるので注意して欲しい。

3. 見出し

Results や **Discussion** が長くなるときは、見出しをつけていくつかの部分に分け、読みやすくする。

4. カンマの多用により文章がぶつ切れになるので、できるだけ少なくする。「ところで、参考まで」といった説明が必要なときはダッシュ（長めのバー）を使うことを薦める。

5. 略語の多用はできるだけ避ける。ポピュラーではない略語の使用は、最大5つまでと考えてもらいたい。略語が多いと、暗号文を読んでいる印象を与える。**Abstract** は本文から独立しているので、本文で使う略語は初出のところで改めて説明する。

6. 図も本文から独立しており、読者が図だけを見ることを考え、図説明には最小限の情報（最も重要な所見）を盛り込む。

7. 同じ言い回し（例えば、同じ動詞や構文を連続して使うこと）を避ける。

8. コロン（:）は「すなわち」という意味で、セミコロン（;）はカンマとピリオドの中間的な意味で用いる。

9. **Times**、**Times New Roman** など一般的なフォントを 11~12 ポイントで使い、十分な行間（スペース）と余白をとる。各パラグラフの最初は 3~5 文字下げる。

英語では行間を読むといったことはないので（コンテキストの低い言語）、言

葉を尽くして説明することを常に心がける。どの一文を取りだして読んでも意味が通じるようであればならない。